

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Study on abandonment in martial arts

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 瀧元, 誠樹, TAKIMOTO, Seiki メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2017

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



武術における「放擲」を考える

瀧元 誠樹

1. はじめに

二〇一二年八月に開催された神戸市外国語大学・バスケット学第二回国際セミナー「グローバルゼーションと伝統スポーツ」の初日に行われた特別講演「身体―ある乱丁の歴史」において、その冒頭で今福龍太は「放擲」することの意味を説いた。スペイン語と日本語を話せるということは、一般的には二つの言語が操れると言われる。しかし、二つの言語、つまり、完結体としての単一言語的なシステムを横並びに存在していると考えるのではなく、一人の人間の中に生きている言葉はひとつであると考えてみるという。

ある人とは日本語で会話し、ある人とはスペイン語を駆使して会話する。だからといって別々の自分が存在するわけではない。自分の周りに、別々の言語を話す人が複数人いて、その場では複数の言語で会話ができていたとしても、そこにいる自分自身は一人なのであり、相手からのアプローチに応じて会話することには何ら区別はない。呼びかけに触発されて考える自分自身は一人なのであり、応答した言葉を客観的にとらえたら別の言語としてみられるだけである。だから、自分自身の言葉としてはひとつしかないというわけだ。

それでも、スペイン語ならスペイン語を学び、修得するか

らこそ操れるようになる、自分のものになる。言ってみればスペイン語での会話能力を「所有」するように思われるが、「所有」するのではなく「放擲」するというのはどういうことだろうか。今福は、「放擲」するとは、「自分で完全に独占することができないような形で解放しつつ、自分が知覚できるところにとどめ置く」ことだと説いていた。さらに、こうしたことは言語の問題だけではなく、身体においてもそうだろう。複数の身体意識や身体感覚が混在しながら、すべて合わせて一つの身体として認識されているような何かがある、と。

それでは、「言語」を「武術」に置き換えて考えてみたい。弓や剣、柔など様々な武術があり、またそれぞれに流派が分かれ、レベルに応じた技が伝承されている。それら一つ一つを、修得し、自分のものにし、使えるようにしていく。「放擲」は、能力を使いこなし、「所有」している主体としての自己があり、使いこなされ、「所有」される複数の言語や技という、所有被所有の関係ではないということだろうか。別の言い方をすれば、「所有」している言語や技の概念を捨てるだけでなく、「所有」している主体としての自己がなくなるといったことだろうか。

そこで、本稿では「放擲」するとはどういうことか、武術

の修行過程から考えてみたい。武術の修行過程での一つの理想として、自然体になることがあげられる。相手の動きを想定し、それに対応しやすい形をあらかじめ準備するのが構えである。修得する技にはそれぞれに構えがある。だからこそ実戦で相手と対峙した時にあらかじめ構えてしまうと、かえってこちらの技を教えてしまいかねないし、想定したことに居つきかねない。うまく構えにはまってくれるなら良いが、何をしていくのかわからないのが実戦である。あらかじめ準備する身構え、心構えることがあだとなりかねない。したがって、相手や技へのこだわりを捨て、無念無想の自然体が求められるのだろう。こうした武術における理想を具体的に確認しながら、「放擲」するとは何か明らかにしていく。

2. 忍びのならない

平安時代末期の武士で源義経の郎党・伊勢三郎義盛は、戦の世において敵陣へ忍び入るための心構えや苦難を耐え忍ぶ心情を歌にして残した。たとえば、「しのびつゝ見たつることを絵図にして 軍者に向談合せよ」のように、忍ぶ様を表したものがあつた。敵の陣容を偵察して見てきたことを絵図にして作戦を立てていく様は、忍者の活躍を彷彿とさせる。そして、忍者の修行を表すものとして、伊勢三郎義盛は次の歌を詠んだ。

しのびにはならひの道はおほけれど 先第一は敵にかづけ

遠く離れた土地に忍び入り、見聞したことを絵図にすることを考えてみても、そのためには各地の風土、習俗、言葉をあらかじめ熟知しておかなければならない。その地に赴くための旅にむけて、食料を得る方法、水源や鉱物を探る方法、天候や天文学的知識、危機管理能力、動物や敵に襲われたときの対処法、戦闘術としての武芸十八般など、多様な習いの道がある。フィールドでのアクションを通じて相手や自然の状況に対応する叡智が、伝承されている。そのようななかで義盛は、忍者の習うべき道は多いけれどもまずは敵に近づくことが、大切だという。それは、どういうことを指しているのだろうか。

藤林保武は『萬川集海』のなかで、義盛の忍歌を取り上げて、敵の隙を窺い危険を顧みずに忍び入る際、その心は刃のごとく堅く鋭くなければ、臆してしまい失敗すると説いている。そして、刃の心と書く「忍」をもって術の名とする、とも。ということとは、敵地へ赴く旅の途上や敵陣に忍び込むために、わずかな動きも見逃さないように神経を研ぎ澄まし、表面だけでは推し量ることのできない機微を察する感性を磨き、敵の出入りに冷静沈着に対応できるように心身を鍛えておくことを、「忍」の字が象徴しているのだろう。技がさび付いてしまわないように、感覚が鈍らないように、鋭い刃のごとく心身を鍛えることが大切だと。そうでなければ、敵に近づけたとしても敵に捕らえられる可能性が高く、任務は果たせず、命も奪われかねないのだから。



写真1 三重県伊賀上野城（左） 忍者に扮装した観光客が堀を眺めている（右）

3. 胆が錬られる

奥瀬平七郎は、『忍術秘伝』において、忍術を行う者は、第一に機敏であれとを説いている。敵に近づくとより、敵に近づいたらどうあるべきなのかを考えているのだろう。敵に近づき臨機応変に対応できるようにするためには、機を見ることを誤らないようにしなければならない。そのためには、平常から精神を鍛える必要があるけれども、技術や知識のみでは鍛えられない。精神を鍛え、機敏になるためには、「胆が錬られる」必要がある。奥瀬は、胆が錬られるために忍術は、体錬の部で常に身を危険に曝しているという。体錬、すなわち身体を鍛える武術の修錬が、心身を鍛え、整える。ここで、武術の修行について理解するために、最後の忍者

と称される藤田西湖の遺した数ある武術の中から『拳法図』の技を一つ取り上げて、具体的に武術の修錬過程を確認する。

図1は、『拳法図』として編まれた五九本の最初の技を表した図である。人智を超えたモノを描こうとしているのか天狗と烏天狗による技が五九種類描かれて



図1 『拳法図』（藤田西湖編、日本武術研究所発行、1985年）の一本目

いる。日本武術研究所では、この図を次のような技として伝承している。

①お互いに立った状態で向かい合う。

②相手は、右足を一步進めながら右拳で自分の腹部を突いてくる。

③自分は、左手で相手の突いてくる右腕を受け流し、その右肘を自分の右脇に抱えるようにする。

④自分は、左手で相手ののど元をおさえるようにして相手の左襟をつかみ、相手の上体を反らせるように押し込んでいく。

⑤自分は、左足裏で相手の右踵を外から内へ刈り、相手の襟をつかんでいる左手はさらに押し込んでいく。

⑥相手が、バランスを崩して自分の左側へ倒れてくるので、自分は左ひざをついて、右腕を極め、左手でのどを押し込んで極める。

この六つの段階は、便宜上一連の流れを分けて記載している。実際には、技の習得状況に応じて、書かれ方は違う。

武術の練習を始めたばかりであれば、師範や先輩の模範を見たとしても何をしているのか見当もつかないだろう。ゆっくりと動きを分節化しながら見せてもらうことで、なんとなくイメージがつかめてくるだろう。そうしたら、見聞きした技の立ち方や姿勢、腕の動きを真似る。この時に自分自身の体をコントロールするのも、まずは身体各部からであり、慣れてくると一緒に動かせるようになってくる。

たとえば、③において、右足を一步引いて立ち方を整えてから左手で相手の突きを受け流していたのが、右足を一步引

きながら左手で相手の突きを受け流せるようになる、といったように。左手で相手の突きを受け流すのも、はじめは相手にゆっくり突いてもらったうえで掌の触れる場所、手首の返しや肘の動きなどを一つ一つ確認して真似ていく。さらに少しずつ突きを速くしてもらおうわけだが、失敗して突かれると当然痛いので、怖くて受けが上手にできない。突かれたくないので、力を入れて速さに負けないように払いのけてしまう。時には、相手の腕をたたいてしまうことさえ起こり、自分の手も痛かったりする。回数を重ねて練習を積むなかでは、腕やお腹を打ち鍛えることもあるだろう。慣れてくれば、怖さも払拭し、たたいたり払ったりすることはなくなり、右腕に触れながら突きの軌道を少しずらず受けができるようになる。そうしたら、今度は相手に突きの腕の速さだけでなく、運んでくる足の動きも速く鋭くしていってもらおう。拳だけでなく、相手の体全体がぶつかってくるように感じるので、ここでもまた怖さが増してきて、落ち着いて足を引いて態勢を整えて受けることができない。大きく飛び退いてしまったり、間に合わなくて突きがもろに入ってしまったたりする。それでも、突かれることによつてかえってタイミングや軌道が判ってくる。そして、慣れてくれば渾身の力で突き込んでくるのでさえ、軽く触れて受け流せるようになる。

同じようにして④、⑤、⑥へと動きがコントロールできるようになってくると、形が整う。形が整う過程で、怖さも克服できて余計な力みもなくなる。慣れてくると、胆が鍛えられていく。しかし、コントロールするという意識的行為をしているうちは、技の完成には届かない。

4. 敵に成る、敵の心を取る、敵に離るる

心身を鍛錬し、形が整ってくることで胆が鍛られていくことを確認してきた。もう少し付け加えておけば、①において相手と立ち合っているところから形を整えることを意識しなければならぬ。つまり、どれくらいの間合いだと相手の突きが届くのかを覚えたり、心身の姿勢や重心移動によって相手の突き始めを察知できるようになったりしなければならぬのである。身構えや心構えを整えて立ち合うことで、相手の攻撃に対応できるようになる。

この身構えや心構えについて、藤一水子正武が『正忍記』で三つの相を説いていることに耳を傾けてみよう。それは、「敵に成る」、「敵の心を取る」、「敵に離るる」の様相である。敵に成るとは、自分が相手になったつもりで心を読んで備えておくことだ。自分と相手との間合いや姿勢から、自分が相手ならばどういう技で攻撃を仕掛けるか考えてから構え、対応する。

さらにその先に、自分が相手ならばこういう攻撃をするだろうと考えて、相手が攻撃を仕掛けやすいようにわざと隙を作ったり、動きはじめのきっかけを与えたりすることで誘い出すのが、敵の心を取るというものだ。

しかし、いずれにしてもいくつもの技を習得しなければ相手の技をあらかじめ想定できないし、自分があらかじめ想定したものが当てはまれば勝てるだろうけれども、外れた場合にはどうなるかわからない。想定外のこと起きて慌てふためくようでは、ぶざまである。むしろ自分は自分、敵は敵と割り切って、敵から離れ、とらわれえないよう説く。あらか

じめ想定するという意味での身構え・心構えを解き、自分の習得した技のエッセンスの数々を収斂させた姿勢Ⅱ自然体で立ち合うことが大切なのである。

5. 非自と他者の違い

あらかじめ想定するという意味での身構え・心構えは、自分の習得した技に寄って立つことであって、言い方を変えれば自己中心的で独りよがりになっていることを意味する。自分の考えたとおりに相手は動くだろうと思ひ、想定内で技を行おうとしているのだから。また、先人たちの築き、伝承してきた技の世界に、身を投じて厳しい稽古を積んで、その世界の内側に立っているということでもある。そこでの相手とは、同じ世界に立たせて自分の想定したことがらをもとに判断した他人である。自己完結している世界観の内側で、自分の投影した光に照らし出された他人の一部を「非自」として認識しているのだ。

ところが、勝負の世界では、敵は敵であって自分ではない。何をしてくるのか判らない、自分の想定もかなわない、投影した光に照らし出されない「他者」が相手として立ち現われてくる。だから、あらかじめ想定して構えるのではなく、臨機応変に対応できると信じて立ち合うしかない。

一所懸命に稽古を積んで心身を鍛錬し、できる限り多くの技を習ひ、差異のある反復を行っていきながら自然体になれたとき、本当の意味で臨機応変にからだに応答してくれる。意識して非自をとらえて対応するのではなく無意識が働き始める

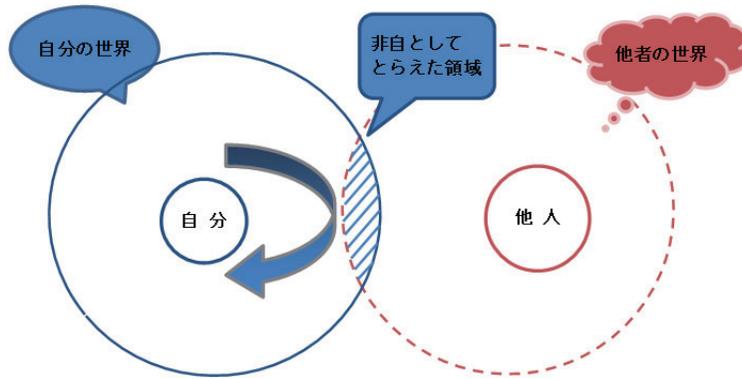


図2 非自と他者の概念図

自分の意識でとらえたことを既知のものとするが、それは自己と他者のイメージが交錯する非自の領域に過ぎない

ように準備して臨むと、他者と立ち合える自己が立ち現れてくる。

6. 無意識が働き始める

伏斎樗山は『猫の妙術』で、自分の意思を相手に投影して立ち合うことを戒めている。伏斎樗山は、孫たちに向けて武術の神髄をわかりやすく説くために、猫たちにこのことを物語らせている。それは、ある屋敷にどうにも手に負えないネズミが出現し、ネズミ捕りの修行を積んだ三匹の猫が捕獲を試みるがことごとく失敗してしまうので、老齢な古猫にその三匹がその理由を尋ねる話である。

黒猫一疋すゝみ出、我レ鼠をとるの家に生れ、其道に心がけ、七尺の屏風を飛び越、ちいさき穴をくゞり、猫子の時より、早わざ、軽わざ至らずと云所なし。或は睡て表裏をくれ、或は不意におこつて、桁梁を走る鼠といへども、捕損じたる事なし。然るに今日、思ひの外成強鼠に出合、一生のおくれをとり、心外の至りに待る。

古猫の云、吁汝の修する所は、所作のみ。故にいまだ、ねらう心あることをまぬかれず。古人の所作を教るは、其道筋をしらしめんため也。故に其所作、易簡にして、其中に至理を含めり。

一匹目の俊敏性あふれる若い黒猫は、ネズミを捕る家に生まれ、早技、軽技を修業し、これまで捕り損じたことがなかったという。それに対して、古猫は、黒猫が修業してきたの

は、技のみであつて、狙う心が現れてしまい、その心に応じてネズミは動いたために仕損じたのだと言う。技は、動き方としての技法だけでなく、道理までも含めて教えられていることも理解するように論じている。

虎毛の大猫一疋まかり出、我おもふに、武術は氣然を貴ぶ。故に氣を鍊る事久し。今、其氣豁達至剛にして、天地に充るがごとし。敵を脚下に踏み、先ヅ勝て然して後進む。声に随ひ、響に應じて、鼠を左右につけ、変に應ぜずといふことなし。所作を用るに心なくして、所作をのづから沸出づ。桁梁を走る鼠は、にらみおとして、是をとる。然るに彼強鼠、来るに形なく、往に迹なし。是いかなるものぞや。

古猫の云。汝の修鍊する所は、是レ氣の勢に乗じて働くもの也。我に恃むこと有て然り。善の善なるものにあらず。我やぶつて往むとすれば、敵も亦やぶつて来る。又やぶるに、やぶれざるものある時はいかん。我覆つて挫がんとすれば、敵もまた覆つて来る。覆ふに、覆はれざるものある時はいかむ。豈我レのみ剛にして、敵みな弱ならんや。豁達至剛にして、天地にみつるがごとく覚ゆるものは、皆氣の象なり。

二匹目の虎毛の大猫は、氣を練り、氣の力によつて威圧して捕まえると言ひ、ネズミを狙う心もなくして技は自然と出てくるものだという。しかし、件のネズミは、来るにも退くにも感じるところがなく、上手く捕まえられなかったのはな

ぜかと問う。すると、古猫は、虎毛の大猫は、氣の勢いに乗じているだけであり、さらにはみな自分より弱いと思うおごりをいましめている。

はい毛の少年闖たる猫、しづかに進て云。如✓仰、氣は旺なりといへども、象あり。象あるものは微也といへども見つべし。我レ心を鍊ること久し。勢をなさず、物と不✓争、相和して不✓戾。彼つよむ時は、和して彼に添。我が術は帷幕を以、礫を受けるがごとし。強鼠有といへども、我に敵せんとしてよるべき所なし。然るに今日の鼠、勢にも屈せず、和にも應ぜず、来往、神のごとし。我レいまだ如✓斯ものを見ず。

古猫の云、汝の和といふものは、自然の和にあらず。思つて和をなすもの也。敵の鋭氣をはづれむとすれども、わづかに念にわたれば、敵其機を知る。心を容て和すれば、氣濁て情にちかし。思ひてなす時は、自然の感をふさぐ。自然の感をふさぐ時は、妙用何れの所より生ぜんや。只思ふこともなく、することもなく、感に随て動く時は、我に象なし。象なき時は、天下我に敵すべきものなし。

三匹目の灰毛の猫は、技や氣には象があるために相手に伝わりやすく、対応されてしまう。だから心を練り、相和して、布で石つぶてを受けるように柔らかく包み込んで捕まえようとした。にもかかわらず、上手く捕まえられなかったのはなぜかと問う。すると、古猫は、灰毛の猫の和は、自然の和ではなく、意識して作り出した和であり、少しでも念があると

捕まえようとする機会を知られてしまう。意識して行うと、自然の感をふさぐことになり、自然の感がふさがれると妙用が生じることはないという。只、思うこともなく、意識してすることもなく、感に随って動くことが大事であるという。さらに、感に随って動くと、象が表れることはなくなり、敵となる者はなくなるといふ。そして、三匹の猫が修行してきたことが間違っているわけではないこともあわせて説いている。

然りとはいへ共、各の修する所、悉く無用の事なりといふにはあらず。道器一貫の義なれば、所作の中に、至理を含めり。氣は一身の用をなすものなり。其氣豁達なる時は、物に應ずること窮りなく、和する時は、力を闘はしめず、金石にあたりても、よく折ることなし。然といへども、わづかに念慮にいたれば、皆作意とす。道体の自然にあらず。故にむかふもの、心服せずして、我に敵するの心あり。我レ何の術をか用んや。無心にして、自然に應ずるのみ。

技を磨き、氣を練り、和する心を大事にするのは、修行過程において必要なことだという。ただ、いずれの場合においても、少しでも念慮を起こして、つまり意識して行おうとすれば、それは作意であって、技の理にかなっていない。ネズミをとらえようとする心、つまり敵対する意識があるのはいけないという。意識してどんな術を用いても駄目である。狙う心を無くして、無心にして、自然に应じて動くことに身を任せることが大事だという。わずかでも意識して立ち合え

ば、みな意識的行為となってしまう自然体ではなくなってしまうのである。

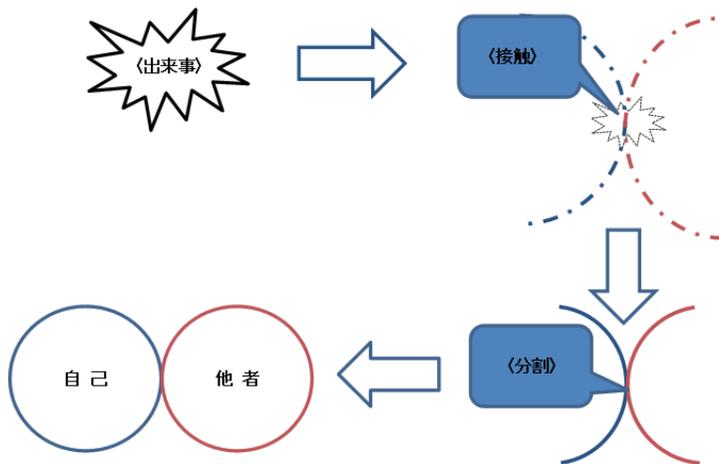


図3 〈出来事〉の概念図

たとえば、先に見た拳法図の技にしても、相手からのアプローチがあつて技は起こる。相手が突いてきてくれることによつて受けられるのだから、形が整つていけば、意識して受けるのではなく、突きの形や勢いが受けさせてくれる。技を行うのではなく、接触によつて技が生まれるのに身をゆだねる。本来的には相手は何をしてくるのかわからないのだから、あらかじめ想定できるはずもない。

だから、図3のように、不意に何かが起こる。へその出来事へによつて、何かと接触することを感じる。その接触到に反応するからだが準備できていれば、何かしらの技が起こる。その結果を受けて、他者を認識するとともに自己も立ち現われてくるのである。ただ、武術であれば気づいた時にはすでに、どちらかがやられていることもあり、生死の境を分けていくかもしれない。いずれにせよ、「無意識が働き始めるようなかからだの状態を正確に準備」しておく、自然と技が生まれてくるのである。

7. 「放擲」としての無敵の姿

忍者は、必要最小限の装備で命にかかわるような危険な任務を遂行しなければならぬ。そして首尾よく生きて帰郷することが求められる。困難に遭遇しても耐え忍び、任務

を遂げなければならない。そのためには、考えうるだけの知識を身につけ、武術の能力を高めておく必要がある。予期せぬ困難な問題にぶつかったとき、動じることなく行動に移せるように、日頃から心身を鍛錬して、準備を怠らないでいなければならない。想定できることすべてに対応する技を修練しておく。そして、敵に近づいたら任務遂行の意思、あらかじめ想定する構えを解いて、我も敵もない無敵の状態にならなければならない。無敵とは、百戦錬磨で向かうところ敵なしという強さの事ではない。

自分という構えがなくなれば、「非自」も意識されず、「他者」も現れていない。あるがままの自然体で、これから起こるのであるう出来事に身をゆだねる。そこで、何かが起こる。

「分割Ⅱ分有」される（出来事）が立ち現われてくる。分割Ⅱ分有とは、ジャン・リュック・ナンシーの用語概念であり、「支配や所有の主体である『私』が立ち上がる以前に、ただ（触れる）というひとつの出来事が、他を感じるものとして自分を目覚めさせている。まさにこのような（接触）が、（分割Ⅱ分有）という出来事」と考えられる。その（出来事）に身をゆだねるよう構えない（構え）が、武術における「放擲」として無敵の姿なのである。

【主な参考文献】

- 伏斎樗山著、石井邦夫訳注、『天狗芸術論・猫の妙術』、講談社学術文庫、二〇一四年
- 今村嘉雄編、『武道歌撰集』、第一書房、一九八九年
- 今村嘉雄編、『日本武道全集』、人物往来社、一九六六年
- 奥瀬平七郎、『忍術秘伝』、凡凡社、一九五九年
- 藤一水子正武著、中島篤巳解説、『忍術伝書 正忍記』、新人物往来社、一九九六年
- 竹内敏晴、『ことが劈かれるとき』、ちくま文庫、一九八八年
- 竹内敏晴、『思想する「からだ」』、晶文社、二〇〇一年
- 西谷修、『増補版 不死のワンダーランド』、青土社、二〇〇二年
- コンスタンチン・スタニスラフスキー著、岩田貴・他訳、『俳優の仕事 —俳優教育システム 第一部』、未来社、二〇〇八年
- ジャン・リュック・ナンシー著、西谷修・安原伸一朗訳、『無為の共同体 —哲学を問い直す分有の思考』、以文社、二〇〇一年
- ベルンハルト・バルデンフェルス著、山口一郎・鷺田清一監訳、『講義・身体の現象学』、知泉書館、二〇〇四年

Study on abandonment in martial arts

TAKIMOTO Seiki

This study was aimed at abandonment (放擲 : HOUTEKI) in martial arts beyond the usual categories. We read martial art books of secrets and were tried on the subject. 『猫の妙術』 ("THE MYSTERIOUS TECHNIQUE OF THE CAT") reveals core believes. It is given below.

When the smallest thing enters one's mind, form will appear. And when there is form, there will be an opponent and there will be oneself. Facing each other, there will be conflict; and in a situation like this, the mysterious functions of change and metamorphosis will not occur with freedom. First, one's mind will fall into thoughts of death and they will lose all clarity of sprit. 'Nothingness' is not what they would call empty-headedness. What the author calling 'Not One Thing' means neither opponent nor oneself, and that there is nothing more than following phenomena as they come, responding to them, and leaving no traces.

Results indicate that abandonment in martial arts is the principle in which there is, and there is not, a stance.